

ぴんぽん、とチャイムが鳴るのは大体この時間。

一応インターフォンで確認してからドアを開けると、そこには見慣れた長身のイケメンが気怠げに立っていた。

「ただいまー」

「……おかえりなさい」

イケメンは薄く笑って帰宅を告げてくる。

なんて答えるべきか迷って、結局私はいつもと同じ挨拶をした。彼は木城要——私に通っている大学の有名人だ。人混みの中でもすぐに見つけられる長身に肩のあたりまで伸びた金髪、切長の瞳はどこかすっきりとした印象を与える、まるで王子様みたいな人。ただその態度はお世辞にも良いとは言えず、常に怠そう、眠そう、つまらなさそうの三拍子。しかもその長い指にはいくつも指輪がはまっていて、ピアスだってしている。完全にヤンキー。

それなのに成績はトップクラス。そんな男が目立たないはずがない。

その木城くんは、くたびれたサンダルを脱ぐと慣れた様子で部屋に上がった。

「今日のごはんなに？」

そう言いながらキッチンを覗き込んでいる。コンロの上のフライパンには今さっきできたばかりの麻婆豆腐が入っている。

「あ、やった」

「もう、お行儀悪いことしないで」

「ちよーど食いたかった」

「聞いてる？」

木城くんはこっちを見るとほんのりと目尻を下げて笑った。

「俺、麻婆豆腐大好き」

「聞いてない！」

ふふ、と静かに笑って、手に持っていたコンビニの袋を差し出してくる。中にはずつと食べてみたかった限定のアイスが入っていた。

木城くんはいつもこの調子だ。決して自分のペースを崩さない。でもいつだって私が欲しいと思っていたものをくれる。それもさり気なく、自然に。だからこうして突然の訪問を許してしまうし、受け入れてしまう。

「冷凍庫に入れとく？」

「……うん」

「おっけ」

歌うように言って木城くんはアイスを冷凍庫にしまった。その整った横顔を見ながら、もう何度浮かんできたか分からない疑問を胸の中で呟く。

なんで毎日うちに来るんだろう……。

普通、特定の異性が毎日構ってきたら自分に好意があるのかも？　なんて思う、と思う。でも私は自分がモテるようなタイプじゃないことを分かってる。特別成績がいいわけじゃないし、なにか特技があるわけでもない。あまりに普通の、ただの大学生。部屋だつてごく普通の学生向けマンションだ。なんならこの下の階に木城くんの部屋がある……らしい。間取りだつて同じのはず。一体なにが面白くてうちに来るんだろう。

木城くんはある日突然うちに来るようになった。

その日はマンションの前でばったり会った。

まさか家の前で木城くんと会うなんて思わなかったから驚いていると、

「鍵落としちゃったかも」って困った顔で言うからうちに誘うことになって……今に至る。

初めの方こそ何かしら理由をつけて来ていたけど、今じゃもうなんの連絡も断りもない。アイスとかお菓子とか、私が読みたかった本だとかを持って来て、ご飯を食べて帰っていく。断ってるのに無理矢理食費も置いていく。野良猫みたいに自由で掴めない。

その木城くんは今ソファで寛いでいる。長い足を投げ出して、私が置きっぱなしにしていた雑誌をパラパラとめくっていた。ただそれだけなのに、驚くほど絵になる。多分あの雑誌に載っているモデルの誰よりもかっこいい。

「……やだなあ」

聞こえないようにこっそりと呟く。

あの木城要がこんなに近くで寛いでいて緊張しない人なんていないと思う。

心臓に悪い。でもその反面でみんなが憧れている人とかんな関係になっ
てい
ることに、ほんの少し優越感がある。よくないことだと分かつてはいるけど。

「美桜ちゃん」

木城くんはその整った顔でやさしく笑って、

「一緒にごはん、食べよ？」

と首をかしげた。

♡
♡
♡

結局二人で夕飯を食べて、手分けして片付けもした。

木城くんはまだうちにいる。ごくごく自然な流れで隣に来たので、二人がけの小さなソファに窮屈に座ることになった。先に座っていたのは私だし、そもそもここは私のうちだし。

隣から淡く香るシトラスにどきどきしながら、ピンクと白のマーブル模様をスプーンで崩していく。限定のストロベリーホワイトシヨコラ。どこのコンビニにもなかったのに、どこで見つけてきたんだろう。

「美味しい？」

「おいしいー！」

完璧なおいしさに大きくうなずくと、木城くんがやさしく微笑んだ。その顔があんまり綺麗で、声がやさしくて心臓が跳ねる。

「よかった、気に入ってくれて」

安心したみたいに言うから胸の内側がくすぐったくなった。

この人はどうして私のことをこんなに大事そうに見るんだろう。

木城くんはふとした瞬間、こうしてくる。宝物の機嫌をとるみたいに丁寧に、慎重に私を扱う。特別扱いされてるかもって勘違いしてしまうから、やめてほしいのに。

もう一口アイスを食べる。甘酸っぱいいちご味を舌に広げながら、私は木城くんから目を逸らした。

好きになっちゃうから、そういうのやめてほしいな。

その言葉ごとアイスを飲み込んだ。報われない恋なんて私はしたくないのだ。

「俺にも一口ちょうだい」

「……木城くん、スマホ鳴ってるよ」

机の上にある木城くんのスマホが無音のまま画面を明滅させて、いくつも送られてくるメッセージを報せている。木城くんはつまらなさそうに目だけでそれを確認すると、スマホを伏せてしまった。シンプルな黒いケースには、可愛いアライグマの小さなチャームが付いている。

「見なくていいの？」

「いいの」

「大事な連絡かもよ」

「いいんだ。どうせくだらないことだから」

朗らかに言う木城くんを見て、なんとも言えない気持ちになる。もし何か私から木城くんに連絡することがあったとして、こんな風に流されたら悲しくて泣いてしまうかもしれない。

崩れたマーブル模様をスプーンで抉る。
報われない恋なんて、したくなかったのに。

♡
♡
♡

「ね、篠崎さん」

「なあに？」

次の日、食堂で男の子に話しかけられた。何度か見かけたことがある程度で詳しくは知らないひと。誰だったっけ……と笑顔の下で頭をフル回転させていると、その人はスマホを見せながら言った。

「あのさ、連絡先聞いてもいい？」

「え？」

「あ、いや、変な意味じゃなくて！前から可愛いなって思ってた」

それは充分変な意味では……と笑顔が引き曇る。すると彼は慌てた様子で続けた。

「SNSでもいいから！教えてくれない？」

「えっと……」

どうしよう。率直に言うとは嫌だ。

ちらりと顔を見ると、彼の名前を思い出した。永田くんだ。

彼の声はやけに大きく、よく通った。そのお陰で周囲の視線を集め始めている。ちらちらとこちらを見る視線が増えていく中で断る勇気を私は持ち合わせていなかった。

永田くんは良いひとそうに見えた。なにかスポーツをしていそうな、爽や

で友達が多そうな感じ。ただ、多分デリカシーはない。苦手なタイプだな、と思った。

「ダメかな」

笑いかけられて言葉に詰まってしまう。

断りたい。だけどここで断ればきつと「ノリが悪い」というラベルが貼られる。それだけは避けたかった。

集団から浮きたくない、嫌われたくない、“普通に”溶け込んでいたい。だから人の頼みを断りたくない。そんな臆病で打算的な本音が、私に拒絶を許さない。

迷っている間にもその視線の数は増えている。注目に耐えきれず、私はとうとうスマホを取り出した。断ることにエネルギーを費やすより、その後や

り過ごすことを考えた方が正解だ。私にとっては。

胃のあたりが重い。心の底にある不快感に蓋をして、私はいつも通り笑って見せながら画面を開いた。

「ね、それ俺とも交換してくんない？」

突然、背後からぬつと長い腕が伸びてきた。長い指にはいくつも指輪がはまっていて、その手が持つスマホの端っこでアライグマのチャームが揺れている。

「げ、木城……!」

「俺、知リたかつたんだ。お前……えーと、名前なんだっけ。……田中でいつか。田中くんの連絡先」

「いや、俺は……」

狼狽えながらも何か言いたそうな顔をしている。そんな“田中くん”に構わず、木城くんが楽しげに続ける。

「あ、SNSでもいいよ」

「……ッ！　なんで」

「なんで？」

見なくても、木城くんがきょとんと目を瞬いたことが分かる。そしておかしそうに言った。

「だって俺ら付き合ってるから」

「え！？」

“田中くん”がぎよっと目を見張り、木城くんの乱入で増えていたギャラ
リーがどよめく。私も驚いて思わず振り返った。木城くんは私を見下ろして、
それからやさしく笑って肩を抱き寄せてくる。

「他の男に彼女の連絡先とか、教えるわけないじゃん。だからさ、田中く
ん」

ばいばい、と口笛を吹くみたいな調子で木城くんが言う。しかも手を振り
ながら。ざわざわと周囲が騒がしくなつて、目の前にいる“田中くん”が顔
を真っ赤にしている。

私はどうしたらいいのか分からなくて木城くんを見る。目が合うと木城く
んはびっくりするほど甘く笑った。こんな状況なのに心臓が大きく跳ねて、
息が詰まる。それを見透かしたようにもつと強く抱き寄せられて、そのまま
歩き出した木城くんに連れられるまま食堂を後にした。背後からなにか、黄

色い声と悲鳴みたいな声が混ざったような音がする。

頭の中がぐるぐる回って全然ついていけない。嬉しいのか困っているのか、自分でも全然分からない。ただ足だけは木城くんを追っていた。

人気がないところまで来ると、木城くんはようやく私の体を離れた。真正面に立つ木城くんは相変わらず綺麗で、息ひとつ乱していない。周りに誰もいないことを確認すると、まだよく分かっていない私に木城くんは言った。

「……ごめん」

「う、ううん、大丈夫。ありがとう」

返事の代わりに困ったみたいに笑うから、私はなんだか泣きなくなってしまう。なんで、どうして、

「そんな顔するの……？」

喉の奥がぎゅつと詰まって視界がぼやけていく。なんなの、という思いが一番先に来た。このひとは私の中に勝手に入り込んできたくせに突然離れていく。

一番近いところにいてよく知ったような気になっていたけど、そんなことなんてない。結局私は木城くんのことなんてなにも知らない。ただ勝手に好きになって、特別扱いされている気になっていただけ。

やだなあ……。

恥ずかしいし、苦しい。せめて笑ってありがとう、とか、ちょっとびつくりしちゃったと言いたかった。どうして木城くんの前ではいつも通りいられないんだろう。

涙がこぼれないように目尻を押さえた瞬間、不意に視界が揺れた。

「…………ごめん」

木城くんが私を抱きしめている。ぎゅう、と音がしそうなほど強く。シトラスの匂いが今までにないほどに近くて、濃い。

肩越しに見える自販機が、妙な現実感を与えてくる。私は何も言えなくて、ただ耳元で繰り返される謝罪があまりにも切実で胸が熱くなった。何に謝っているのかは分からないけど、とにかく許してあげたくてそつと腕に触れた。

「ごめんな、あんなこと言って」

抱擁が緩んで向き直る。木城くんはまるで迷子の子供のような顔をしていた。

「嫌だったんだ、美桜ちゃんが他の男と仲良くなるの」

「……どうして？」

「分かんない？」

形のいい眉を下げて笑うと、私の頬をやさしく撫でた。

「好きだから。俺、ずっと美桜ちゃんのこと好きなんだ」

乾いた指が頬をすべって髪に触れる。熱くなった耳に髪をかけるみたいに
して撫でていく。

「本当はもっと時間をかけるつもりだったのに、我慢できなかった。ごめん
ね」

「うそ……」

「ホント」

びっくりして声が出ない。木城くんはおかしそうに笑うと、小さく首をかしげた。

「俺、好きでもない女の子の家に行ったりしないよ？ 美桜ちゃんちにしか行かない。美桜ちゃんが作ったご飯しか食べないし、美桜ちゃんとしか付き合いたくない」

朗らかに、歌うみたいに言いながら、その目は真っ直ぐに私を見つめている。獲物をとらえた獣みたいな、じりじりと熱い眼差しがその言葉が嘘じゃないと訴えてくる。

「木城くん……」

「ね、俺と付き合おう？ ずっと一緒にいて、俺にだけ優しくして。俺、美

桜ちゃんだけを大事にしたい」

想像もしなかった量の好意を一気に向けられて目眩がする。だって絶対報われない片思いだと思っていたから。ひそかに好きでいて、木城くんが私に飽きたらおしまい、そういうものだと思っていたのに。

木城くんは黙って私の返事を待っている。どうしよう、信じたい、頷いて「私も好き」って言いたい。でも、

……もし、すぐ飽きられちゃったら？

結局私は自分に自信がないのだ。自信がないから木城くんを信じられない。嫌われたくない。傷つきたくない。自分のことばかり考えている、卑怯で臆病な私。こんな時まで自分本位な考えが嫌になって、涙が滲んだ。

「……分かった」

ため息の音にびくりと肩が跳ねる。もう一度ぎゅっと強く抱きしめられて、それから耳元で木城くんが低く囁いた。

「いいよ、俺が本気だって分かってもらうことにするから」

爽やかなはずのシトラスが、どこか甘苦く香る。

「そしたら美桜ちゃん、ちゃんと言ってくれるよね。きっと」



「は……っ、う」

ドアを閉めるなり唇を塞がれた。がちゃん、と鍵が閉まる音がして、すぐに深く抱きしめられる。

軽く触れ合って、離れて目があつて。もう一度触れて、舌が絡んで……息ができなくて無理やり顔を離したら、もつと深く舌を絡め取られた。毎日見ているはずの玄関が、なんだか別の場所のように感じる。

「待つ、て、木城くん……っ」

「やだ、もう待たない」

「そんな……っ」

ふ、と笑った吐息が濡れた唇に触れて、また息ができなくなる。ぬるりと舌がすべり込んできてあつという間にすべて絡め取られる。舌の表面をこすり合わせて、根本の方から甘く啜られると背筋が熱く震えて、力が抜けていく。そしてそれを許すように大きな手が背中を摩るから、私は不器用な呼吸

を繰り返しながら深いキスに応えるしなくなってしまう。

「……美桜ちゃん」

「ん……っ、あ、なあに……？」

「俺さ」

ちゅ、と音を立てて頬に口づけられる。

「ずっとこうしたかったんだ」

「え……？」

色素の薄い金色の前髪がさらりと流れて、愛おしそうに細められた瞳が見えた。

「初めてしゃべった日から、ずっと好きだった。どうやったら好きになってもらえるか考えて、真面目に学校行って」

「……ッあ」

首元に顔が寄せられて、きつく肌を吸い上げられた。そこを舐めながら長い指が背筋をなぞる。

「ホントはもっと待つつもりだったんだ。だって、美桜ちゃんが自分で決めなくちゃ意味がないから」

ぷつん、とブラのホックが外れた音がして胸の締め付けがなくなる。熱く濡れた吐息が肌を撫でて、触れられたところからゆっくりと体温が上がっていく。

「でもさ、もうそんなこと言ってられない」

「え……？」

「もう我慢できない。すぐ俺のものにしなきゃ。でも安心して、俺は美桜ちゃんを大事にするって決めてるから。本気で好きなんだ」

ちゅ、と唇を啄んで、木城くんは言う。

「ね、今日は泊まっていてもいいよね？」



「あ♡ ツあ、んだ……っ♡ —……っ……♡」

もうどれくらい経っただろう。

ベッドに移動して服を全部脱がされて、全身をやさしく撫で回されている。横になったまま後ろからすっぽりと覆うように抱きしめられて、そっと肌の表面を撫でながら首や耳の後ろにキスをされる。初めはくすぐったくて恥ずかしいだけだったのに、今ではもう乾いた手が体の上ですべるだけで声が出してしまう。お腹の下の方が熱くなって、じくじく疼く。まだ何も始まっていないのに、体の芯から発情しているようだった。

「は、あ………♡ つ、ん………♡ き、じょうくん………っ」

「なに？」

「あッ♡」

すり…♡ とおへその下を撫でられて、びっくりと腰が跳ねた。

今まで意識もしたことがない場所が痛いほど疼いて、自分が何を求めている

るのかを分からせられる。それを見透かしたように、木城くんが指を柔らかく食い込ませてそこを撫で回した。

「あ♡ つん、んん……ッ♡ う、♡」

「ね、美桜ちゃんはどこ触られるのが好き？」

「分かんない……いつ」

「そっか」

耳の後ろで薄く笑う気配がして、お腹を撫でていた手が更に下がる。

「ッあ！♡」

指がおまんこの筋をなぞって、すり…♡ とクリトリスを撫であげた。はじめて得た直接的な刺激に大袈裟なほど腰が跳ねてしまう。

すり…♡　ぬりゅ♡　ぬる♡　くる♡　くる…♡

「あ♡　ん、ん♡　ああ…っ♡」

「こことか、好きじゃない？」

「ああ…っ♡　あん♡　う、う♡」

長い指がクリトリスを優しく撫で回す。触られてもいないのに硬くなっていたそれは敏感で、なぞっているだけみたいなのに加減なのに驚くほど刺激が強い。いつの間にか濡れていたみたいで、指で愛液をすくってそれをクリトリスに塗りつけられる。ぬるぬると指がすべる度に声が溢れた。

「ッふ♡　あ♡　ッうう…っ♡」

「美桜ちゃん、分かる？　ここ、硬くなってる」

「やああ…っ♡　あ♡　んうう——…っ♡」

ぬる♡　ぬりゅん…♡　ぬちゅぬちゅ♡　ぬ…ちゅ♡
とん、とん♡　とちゅ♡　ぬちゅ♡♡

「あ♡　ああ……ッ♡　や♡　とんと、んやだ……っあ♡」
「ホント？　気持ちよくない？　もっとしてみよっか」
「ッああ♡　お♡　だめ、だ、め……え♡」

いじわる……っ♡

指で優しく叩かれてクリトリスはここだって、ここで気持ちよくなってるんだぞって示される。

根本の奥まで甘い刺激が響いて腰がびく♡　びく♡　跳ねる。どう見ても感じているのに木城くんはやめてくれない。きつと私が認めるまでやめないつもりだ。シーツをぎゅっと握って目を瞑る。

やだ、やだ♡ 恥ずかしい、だめ、いく、イっちゃう……ッ♡
スとんとん♡ されただけでイっちゃ、う……♡♡

とんとんとん♡ どちゅ♡ ぬちゅ♡ ぬちゅ♡ とちゅ♡

「あ♡ おッ♡ お♡ ッく♡ い、ッ……ッ♡♡」

びくびく、くッ♡ びく、んっ♡

ぬちゅ……♡ ぬる♡ しこしこ♡ しこ♡ ぬりゅん♡♡

「んおッ!?!♡ あ♡ な、に♡ あッ♡ あう♡」

何が起きたのか分からなくて腰を振ると、ぎゅ♡ とクリトリスを指で挟
まれた♡

イッたばかりの体には刺激が強すぎて「お♡」って汚い声がお腹の底から出てしまう。自分でも聞いたことのない声で遅れて恥ずかしさが込み上げてくる。よりによって木城くんに聞かれるなんて……。引かれていないか不安で肩をすくめると、後ろから強く抱きしめられた。

「……可愛い」

「う、え……？ ツあ♡ あん♡ んうう……っ♡」

耳元で熱っぽく囁かれて、それから指で挟んだクリトリスをしこしこ♡扱かれる。小さいくせにがちがちになったクリトリスを包皮の上から、優しく、甘く執拗に扱かれて……。♡

「ヅ♡ つふ、ぐう……ッ♡ ぶん♡ あ♡ ツ♡」

「声、我慢しないで。聞かせて？ 美桜ちゃん」

しししししこ♡　ぬぢゅぬぢゅ♡　ぬりゅん♡　ぢゅこ♡　にぢゅ♡

「ふ、あ…ッ♡　あ♡　ッあん♡　お♡　お♡　んお、ッ♡　お、ほ……づ♡」

視界が白く弾けるような強い刺激に耐えきれず啼くと、耳の裏にちゅちゅ♡　とキスをする唇から、興奮したみたいな熱い吐息が溢れてる。

あの木城くんから雄の気配がして、胸の奥がぞわぞわと震えた。好きな人が私相手に興奮してるといふ優越感にも似た劣情に、体が二度目の限界を迎える…♡

「ッお、お……っ♡　いく、ん……ッうう♡♡」

腰がぐつと前に出て全身が強張る。体の内側を突き抜けていく快感に頭の芯がじわあ……♡と濡れたみたいに熱くなった。

「は、あ……お♡ん……♡」

「気持ちいい？」

「きも、ちい……♡」

流石にもう嘘は吐けなかった。じくじくとお腹の奥が疼いて、まだ指に捕まっているクリトリスは熱い。全身の力が抜けて、もう気持ちいい事しか考えられない……♡

「あー……、ホント可愛い。ね、もう一回しょ？ 俺、もっと聞きたい」
「え……？ ……ッ♡」

力が抜けてしまった体が抱き直された…と思った瞬間、ぐ…♡とお尻に熱い塊が押し付けられた♡♡

「あ、これ…っ♡」

「うん、美桜ちゃん可愛いから」

耳に熱い唇と吐息が触れて、また指がぬりゅん…♡とクリトリスを撫でる。

「んあ…♡ イったばっか、なのに…っ♡」

「今したらもっと気持ちいいよ、美桜ちゃん泣いちゃうかも」

ゾットするほど甘く囁いて、長い指に少しだけ力が入る。来る…♡と身構えたのとほとんど同時に再開された♡

「んお♡ ツお♡ あ♡ あ♡ あ——っ♡♡」

さつきと比べて格段に滑りが良くなっていて、それだけ感じて濡らしていたということを理解して恥ずかしくなる。でも同時に、そんなことどうでもいいってほど気持ちよくて、理性とかそういった何か大切なものがぷちぷちと音を立てて千切れていくのを感じた。

ぬぢゅぬぢゅ♡ しこしこ♡ しこ♡
ぬりゅ♡ ぬぢゅぬぢゅ♡♡

「は♡ つお♡ お♡ ツああ♡ きもち、い♡」

「クリちんぽ、きもちい？」

「きもち♡ きもち、いい……っ♡ あ♡ す、ごい♡ あ♡ あん♡ ん

ん♡♡」

クリちんぽ♡ を指で挟んだまま、木城くんが腰を振る。ごり♡ ごり♡ おちんぽがお尻に食い込んで、私の腰が前に押し出される。ピストンのやり方を教えるみたいにそうされると、ずりゅん♡ とクリちんぽが指に擦れて気持ちいい…♡

あ♡ あ♡ これだめ♡ だめ♡ 腰動いちゃう♡ 指きもちいい♡♡

へこ♡ へこ…っ♡ へこへこ♡
ぬりゅ♡ ぢゅこ♡ ぬぢゅぬぢゅ♡ ちゅこ♡ ちゅこ…♡

いつの間にか私は自分で腰をへこらせて、指にクリちんぽを擦り付けていた♡

腰を動かす度に皮がぬるん♡ と剥けて、甘く痺れるような刺激が突き抜

ける。お尻に熱いおちんぽがごりごり♡ 食い込んで、少しでも腰へこが小さくなるとまるで叱るみたいに押される。結果私は休むことなく情けない腰へこでクリちんぽを刺激して……♡

「お♡ お——♡♡♡ こ、し♡ 腰うご、く……♡♡」

「ふー……♡ 美桜ちゃん、上手……自分で腰振るの気持ちいい？」

「う、ん♡ きもちいい♡ あ——♡♡♡ あ♡ は、へ……♡♡ お♡♡」

随分やさしく指で挟まれているお陰で、どれだけ腰をへこらせても甘い快感が滲むだけ……♡ 気持ちいいところだけをすくって食べているような、頭の芯からぐずぐずになる行為に顔が緩んでしまう。きっと今見せられない顔になってる……♡ 快楽を味わってるだらしなない雌の顔になってる……♡

へこへこ……♡ ぬるー……♡ ぬる♡ ぬぢゅ……♡

「俺の指、好き？」

「おッ♡ すき、ッ♡ す、き……っ♡」

「指だけ？」

「おッ♡♡」

不意にきゅ♡ と潰されて、びくん♡♡ と腰が前に出る♡

今までやさしく、物足りないくらい力の加減で添えられていた二本の指が、ぎゅう、とクリちゃんぽを挟むと、木城くんは耳たぶに舌を這わせながら腰を揺らした。私の腰へコがままごとだったって思うくらい強い……♡

雄の力で補助されたピストンによって、指で圧迫されているクリちゃんぽが激しく扱かれる♡

ごりごり♡　ぐり♡　ぐッ♡　ぐッ♡

♡
ぢゅこぢゅこ♡ ずりゅ♡ ずぢゅ♡ ぢゅぐ♡ ぢゅこぢゅこぢゅこ♡

「んおッ♡ お♡ ほ、お……ッ♡ 待つて、待つてえ……ッ♡ あ♡ お♡ お、ッん♡」

「待たない♡ あー……、好き、大好き」

「お、お♡ いく♡ い、ぐ♡ ああ♡ クリ…っ♡ い、う♡ いく♡ んお、おッ♡♡」

びくびくッ♡ び、くんッ♡♡
ぷしゅ♡ ぶ、しゅッ♡♡

「んあぁー……っ♡ お♡ お……っ♡♡」
「わ、すっごい……」

「あ♡ あっ♡ あ♡ ごめ、ッ♡ やああ……っ♡」

なに♡ なにが起きたの……っ♡

一際大きい波が来たと思ったら、なにか熱いものが一気にふき出した。びゆく♡ ふしゅ♡ と溢れるそれを手のひらで受け止めて指ですくって、おまんこ全体に塗りつけられる。

「ああ……っ♡ やだ♡ やめ……っ♡」

「大丈夫、おもらしじゃないから」

「うう、っ♡ ぐ♡ あ♡ あん♡ んん——……っ♡」

にちにち……♡ ぬる♡ ぬりゅん……♡ にゅちゅ……♡ ん♡

「はあ、ッ♡ あ♡ なでなで、やだあ……っ♡」

「なんで？ ほら、潮吹きできてえらいねーって」

「潮ふ、き……っ？ あ♡ んああ……っ♡ お♡ お、っ♡」

大きな手のひらがおまんこを包んで、ぬるぬる♡ と前後に動く。たつぷり溢れた愛液とはじめて吹いた潮を混ぜて、おまんこの入口もクリもまとめやすしく捏ねる。たまに手が左右にむりゅん♡ と動くと、揃った指の凹凸が引っかかってもっと気持ちいい……♡

もっとそうして欲しくて足が開く。横になったまま片足を少しだけ持ち上げると、すかさず木城くんの片腕が私の足を捕まえた。木城くんは自分の足に私の片足を引っ掛けると、ぱかあ……♡ と無防備に開いたそこを円を描くように撫で回してくれた……♡

「あー……すっごい、ぬるぬるだ。ね、美桜ちゃん、分かる？」

「ほ、おッ♡ お♡ お♡ わか、るッ♡ ああっ♡ あっ♡ んお、ッお

♡」

「びくびくして、すっごい気持ちよさそう。気持ちいい？もっとする？」

「きもちいい……っ♡　っあ♡　あん♡　ん♡　も、っ♡　もっとし、
て……っえ♡」

フー……ッ♡　って首に熱い息がかかって、びくん♡　と体が跳ねる。側位
で後ろから体重をかけるみたいに強く抱かれると、ぬぷ……♡　と指が入っ
て来た……♡

ぬぷ……♡　むちゅ……♡　ずりゅう……♡
ぢゅぽ♡　ぐちゅ、にちゅ♡　ぐ、りゅん♡　にちゅにちゅ♡　ぢゅぽ♡

「ふあ、ああ……っ♡　あ♡　んお……♡　お……ッお♡　ゆび、い……っ♡
おまんこ握ねて、え……っ♡♡♡」

「あっつ……♡　すごい、とろとろだ。指奥の方まで入っちゃった。ヤバイ、めっちゃくちや気持ち良さそう」

中指がおまんこにずっと沈んで、奥の方を開くように捏ね回す。にちにち♡　と粘着質な音が鳴って、気まぐれに指が引き抜かれるとぞくぞくと背中が震えた。どこを擦られても気持ちよくて、信じられない。

正直、おまんこはあんまり感じない場所だと思っていた。元カレとのセックスでもそうだったし、たまに自分でしてみてもあまり気持ちよくなれない。だからずっとそう思っていたのに……♡

「ほ、……ッお♡　ああ♡　んお♡　おッ♡　そ、こ♡　そこ、変……っ♡　ぞわぞわ、す、る……う♡　ッお♡」

「大丈夫、そのまま……♡」

「あッ♡　あ♡　んお♡　お、っ♡　お……っ♡　あうッ♡　あッ♡　あ♡

いく♡ いぐ♡ イッ、——……!♡♡

ぶしゅッ♡ ぷしッ♡ びゅくんッ♡

びく、び、つくん♡♡ へこ、へこ♡♡ へこ♡♡

「おッ♡ お——…ッ♡ で、て……えっ♡」

「ここ弱いんだ、覚えとこ♡ ここ捏ねると潮吹いちゃうね、美桜ちゃん」

「あっ♡ ぐ♡ そこ♡ そこだめ…えっ♡ ん♡ お♡ 腰うご、く

……っ♡」

お臍の下あたりを擦られるときちりと尿道に力が入って、しよろ…♡ と残っていた潮がだらしなく漏れる。片足を木城くんにつけておまんこを見せつけながら、腰が揺れる。もっと♡ もっとして♡ って強請るみたいな動きを恥ずかしがる理性なんてもうない♡

ずっと感じないと思っていたおまんこが、ただ指を咥えて気持ちよくなっている。汗ばんだ肌をくすぐる吐息にさえ声が溢れるほど敏感になって、まるで体が全部作り替えられたみたい。シーツを掴んで頭をのけ反らせて、ぢゅぐぢゅぐ♡ 弄られる快感に夢中になった♡

「美桜ちゃん……♡」

「ひ、う♡ なに……？ うあ、ッ♡♡」

ぬるん♡ と指が引き抜かれて、うつ伏せになるように背中からのしかかれる。膝が中途半端に立っていて腰だけが上がった。動物が交尾する時のように重なり合った状態で、捕まえるように抱きしめられた。体に回った腕にがっちりとはさまれて身動きがとれない。木城くんってこんなに力強かったんだ……♡

「美桜ちゃん、ちっちゃ……♡」

「っあ……♡ ふ♡ つふう……♡」

ずるん……♡ とおちんぽがおまんこの間を滑った♡

ぎゅうぎゅうに抱きしめられているから直接見ることはできないけど、太い竿がおまんこをのヒダを押しやって、びくびく脈打っているのが分かる。やけどしそうなほど熱くて、亀頭がむっちりとクリを押し潰している……♡

耳の裏側にちゅ♡ ちゅ♡ と熱っぽくキスをしながら、ずりずりとおちんぽをこすり付けられた♡